

中等教育におけるオーラル・ヒストリー・プロジェクトの展開 その(3)

早川 則 男 (中村中学・高等学校教諭)

1. これまでの研究成果と課題の確認

(1) 過去の研究報告

- 「歴史教育におけるオーラル・ヒストリー手法の活用に関する一考察」
 (日本私学教育研究所 紀要 40-(2) 2005年3月 所収)
- 「中等教育におけるオーラル・ヒストリー・プロジェクトの展開 その(1)」
 (日本私学教育研究所 紀要 41-(2) 2006年3月 所収)
- 「中等教育におけるオーラル・ヒストリー・プロジェクトの展開 その(2)」
 (日本私学教育研究所 紀要 42-(2) 2007年3月 所収)

(2) 主な研究成果

ポール・トンプソン『記憶から歴史へ』に依拠しつつ、オーラルヒストリー手法に関する理論的整理を行った。その結果、オーラルヒストリーをインタビューからの引用と議論を組み合わせるという歴史叙述の方法とする定義を採用した。

学校教育におけるオーラルヒストリープロジェクトの観点から、生徒、語り手、地域の変容の可能性について論じた。

東京大空襲の体験者、鈴木喜久子氏をお招きしての実践では、上記 に関して、以下の点を確認できた。

- (a) インタビューを通じて、生徒が聞く力、コミュニケーション能力、話し手を気楽にさせるなどの基本的な社会的スキルを修得する一助になり得る。
- (b) オーラルヒストリープロジェクトの効用として話し手自身が過去を獲得する点があげられる。具体的には、これまで同氏が著述などで触れていない記憶の再生等である。
満州からの引き揚げ経験者、加瀬幸子氏をお招きしての実践では、以下の点を整理した。
- (c) オーラルヒストリープロジェクトは、戦争の残虐性を強調する際に見られがちな生徒の「戦争話の拒否」反応を克服する手立てとなり得る。実際には、多くの生徒が収容所生活で強まる家族の絆、小さな体で家族を支える母親の気丈な精神、勇気、愛情という点に深い共感を示した。
- (d) 上記(c)の点は、戦争を克服すべき人類の「難病」として捉え、そのメカニズムを解明し、過去の事例を解明しようとする生徒の主体性の決意を喚起する契機となり得る。

(3) 明らかにされた課題：オーラル・ヒストリー・プロジェクトに求められる新たな地平 (混迷の時代の要請)

オーラルヒストリーにおける多様な集合的記憶の解明の取り組み

- (a) 被害者、加害者、傍観者からの声も聞き取り、彼らがどうしてそのような人生を生き、また、自らの人生を戦後語り続け、また現在どのように語っているのか(あるいは語っていないのか)を聞き取ることが重要である。
- (b) 個人の語りや次の世代にどのように伝えられているのか、家族の中で戦争の記憶がどのように子どもたちや孫たちに伝えられて(あるいは隠されているのか)、口述の証拠を通しての実証的な研究が求められる。

多様性を束ねる共通性への視点

- (c) 体験者の証言が個々の体験を強調するうえでおこりがちな「独特のバイアス」のために、体験を共有できないことの危険性を持つ。
- (d) 様々な経験の中から、多様性を束ねる共通性、そして共通性を貫く多様性に目を凝らして、それぞれの体験を規定している政治や経済、国家や帝国といった歴史を読み解こうとする姿勢を自ら持ち、生徒から導き出すことが大切である。

グローバル時代の歴史認識の問題（清算されない過去の問題）

- (e) 侵略戦争と植民地支配の過去を封じ込めていた冷戦構造が崩壊する一方、冷戦後のグローバリゼーションのなかで新しい平和的人権的秩序の模索が始まった。
- (f) 戦後のアジアで日本がどんな役割を果たすかが、過去の清算と密接に関わることが強く認識された。しかし、この点に関する成果は上げられていない。
- (g) このような混迷の時代背景の中で、政府の意向やメディアの影響を受けて、特定の主張を持った集合的記憶が頭をもたげたり、公的記憶が形成される危険性を孕んでいる。

例：「日本の首相靖国神社参拝問題」「米国真珠湾国民記念日の問題」「エノラゲイ論争」「従軍慰安婦の問題」

2. 混迷の時代の要請への挑戦：

清算されない過去の問題の克服に向けてのパールハーバープロジェクト

(1) パールハーバープロジェクトの概要

開催目的

ハワイの東西センターがアリゾナ記念館協会、国立公園管理局の支援を得て、ワークショップ型の教員研修会を開催し、日米の社会科系教師が集い、共同単元開発を目的とした日米共同ワークショップを行っている。

主催者及び関連機関

東西センター（East- West Center）

研究や教育活動を通じて、アジア並びにアメリカを含む太平洋諸国の人々及び国が、相互理解を図り、良好な関係を築くことを期待して1960年にアメリカ議会によって設置された非営利機関である。

アリゾナ記念館協会（Arizona Memorial Park Association ?）

議会によって設置された非営利機関

国立公園管理局(National Park Service)

真珠湾攻撃の様子、沈没した戦艦、第二次世界大戦、日系兵士の活躍、生存者の証言などを展示している。

ワークショップの日程

1 回目の開催：2004年にアメリカ教師を対象にはじめて開催。

2 回目の開催：2005年8月7日～12日に開催。初めて、日本人教師6人が招待された。

- ・ワークショップでは「日米関係のコンテキストにおける真珠湾とハワイについて生きている歴史を探求し、歴史学習と教室の生徒をつなぐことを支援する。参加者は、個人的物語、生存者の写真、写真、記事、新聞記事などを活用し、歴史的事象への批判的思考技能と展望意識を培うことを目指した指導案の作成やテレコラボレイティブ・プロジェクトを立ち上げる」ことを求められた。

3 回目の開催：2006年7月23日（日）～28（金）に開催。日本からは、筆者を含めて日本人教師4人が招待された（社会科3人、英語科1人）。講義、見学、ディスカッションをまじえて、教材開発（グループプロジェクト）、成果のプレゼンテーションまで実施された。以下、1週間の日程を摘記する。

<初 日>：Arizona Memorial 及び the USS Bowfin Submarine Museum 見学。

真珠湾攻撃での米軍関係生存者や民間人証言者との交流レセプション

<第2日>：「歴史・記憶・記念碑」をテーマに研究者や実践先行事例に関する講義・討論会

- <第3日> : Hickam air Force Base 他、真珠湾攻撃で被害を受けた戦跡見学。
午後は戦没者慰霊碑 (National Memorial Cemetery 通称"Punchbowl") 訪問と日米和解の式典
- <第4日> : 日本の学校教育での「真珠湾」の扱い方についての報告と討議
「先住ハワイ人にとっての真珠湾」に関する講義
- <第5日> : 日系人にとっての第二次世界大戦に関する講義と実践報告
グループ別の共同開発プロジェクトの立ち上げ
- <第6日> : 生存者による真珠湾体験の証言と和解に向けてのアプローチ
共同開発の教材・指導案に関するグループ別プレゼンテーション

(2) 日米教師が共同開発を行う意義

ワークショップでは「日米関係のコンテキストにおける真珠湾とハワイについて生きている歴史を探求し、歴史学習と教室の生徒をつなぐことを支援する。参加者は、個人的物語、生存者の写真、写真、記事、新聞記事などを活用し、歴史的事象への批判的思考技能と展望意識を培うことを目指した指導案の作成やテレコラボレイティブ・プロジェクトを立ち上げる」ことを求められた。日米の教師がゼロから協議し、その場で共同で単元開発し、持ち帰った単元案を日米双方で実践する。日米相互理解の視点は勿論、生徒の変容に加え、教師の変容も視野に入れた取り組みとして注目される。

また、この取り組みは、前述した最大の研究課題であるグローバル時代の歴史認識の問題の克服への積極的なアプローチとして期待されるものであろう。

(3) 日米教師による授業構想

以下、授業構想を示す。実践は半ばであるが、後日、その成果を報告すべく準備中である。

(単元名): 太平洋の戦争追体験

担当: 早川則男、和田康彦、Rene Mendoza、Suzanne Acord

(プロジェクトの素描)

生徒は第二次世界大戦におけるアジア太平洋戦争の内容を理解するために多角的視野から調査を行う。

(主要な問い)

戦争は人々にどのような影響をもたらしたか。

(理論的根拠: Rationale)

第二次世界大戦アジア太平洋戦争によって影響を受けた人々への歴史的共感を発展させる。

日米の生徒の文化的対話と理解を深める。

戦争無き世界を創造する。

(学 年) 中3 ~ 高3

(当該教科・科目)

世界史、アメリカ史、世界的課題、英語、現代事情、国際関係

(授業時間数): 5 時間程度

(必要な材料): 印刷物、色鉛筆、コンピュータ、トランスペアレント(スライド)、ハサミ、ノリ、色紙、罫線紙。

(学習の目標)

アジア太平洋戦争によって、人々がどのような文化的に多様な形で影響を受けたのかを探求する。

(各段階における生徒の活動)

1. 生徒が自分たちの価値観のリストを作成する。
 2. 価値観を他の生徒たちと共有する（この活動を通じて他校の生徒と文通を始める）
 3. 読み教材を以下のように提示される。
 4. 評価：読み教材によって、以下の各レベルの問いを完成させる。
 - (1) テキストから、どのような事実が読み取れるか。
 - (2) 行間を読み取り、ある部分の分析と解釈を行う。
 - (3) 読後、問いが引き金になって意見を持ち寄り議論を展開する。
 5. 問いのレベルに応じてクラスで議論を展開する。
 6. 生徒が家族に戦争の出来事を思い出してもらい、戦争についてどのような感情を持っているのか。
 7. 戦争体験のインタビューは授業仲間やメールを通じて、他の学校の生徒たちとも共有される。
 8. 評価：生徒は問いのレベルに応じてイラストジャーナルを作成する。ジャーナルを創造する前に印、国籍、性別、年齢、1941年から1945年の間どのような役割を果たしていたのかを描写する。
 9. ジャーナルは他校（他国）の生徒に送られる。
- <選択課題>
10. ジャーナルを見た感想（本人や家族周囲の人も含む）をメールで送る。
 11. 他の記念碑や博物館を訪問する。(Memorial Museum on the Website)



△ 教材開発の討議の一コマ



△ 関係スタッフとともに